



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

国立教員養成系大学の学生像と教職観： 東京学芸大学における教員養成課程と新課程の比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木村, 育恵, 中澤, 智恵, 佐久間, 亜紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/1436

国立教員養成系大学の学生像と教職観

—— 東京学芸大学における教員養成課程と新課程の比較 ——

木 村 育 恵*・中 澤 智 恵**・佐久間 亜 紀***

生活科学**

(2005年9月30日受理)

KIMURA, I., NAKAZAWA, C., SAKUMA, A.: Students' view to teaching and learning in Ed-Schools : A comparison between students in teacher preparation program and ones in non-TE program in Tokyo Gakugei University. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Educational Sciences, 57 : 403-414 (2006) ISSN 1880-4306

Department of Home Economics, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan

1. 本稿の主題と研究方法

現在、国立教員養成系大学・学部における「新課程」の意義が問われている。「新課程」とは、教員養成系大学・学部でありながら、教員免許取得を卒業要件として義務づけられない課程の総称である。正式な課程名称は各大学で各大学で異なるが、いずれも「ゼロ免課程」と通称される。

この課程は、教員需要の低下に伴い、1987年以降、ほとんどの国立教員養成系大学において、教員養成課程の入学定員の一部を改組して創設されたものである。主として学生定員削減政策の結果生じたという経緯に起因し、新課程は設置当初からその教育目標を曖昧にしていると指摘されていた。さらに、国立大学改革および教師教育改革がすすみ、教員需要の回復がみられるようになったため、近年再びその存在意義が問われるに至っている。2005年8月には、国立教員養成系大学・学部3校が新課程の廃止を、4校が縮小を決定した。

しかし、設立後約20年を経過した現在まで、新課程に在籍する学生の実態調査、および教員養成課程の学生との相互作用の実態の把握などは、ほとんど行われてこなかった。

本研究は、新課程の意義をめぐる議論に、基礎的かつ

実証的知見を提供することを目指す。

国立教員養成系大学・学部には、どのような学生が在学しているのだろうか。特に、教員養成課程と新課程の学生には、出身階層や成績、職業観や教職志望度などに、どのような差があるだろうか。さらに、それらに男女差はあるだろうか。あるとすればどのような差なのか。本稿では、これらの問いに迫るために、東京学芸大学を対象として、教員養成課程と新課程¹の学生の特徴を、質問紙調査によって実証的に明らかにすることを課題とする。

先行研究においては、新課程のみならず、そもそも国立教員養成系大学・学部には、どのような学生が、どのような理由で入学し、その中に教職志望者がどの程度含まれているのか、等についての実証的データはほとんど提供されておらず、課題となっていた²。

また、先行研究は、教職志望者の調査について、男女別統計³の重要性を示唆している。特に諸外国における調査は、教職志望者のうち男性は中下層出身者が多く、女性は中上層出身者が多いことを明らかにし、教職につくことの意味が男女によって異なることを指摘してきた。つまり男性は、教職につくことによって階層の上昇や安定を志向する傾向があるのに対し、女性は、職業志向と性別役割分業観との葛藤を解消するために、教職

* 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

** 東京学芸大学生活科学講座 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

*** 教員養成カリキュラム開発研究センター (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

を志向する傾向があるというのである。さらに、特に男性に顕著な傾向として、経済的安定や保守的価値観を重視する傾向が指摘されてきた⁴。したがって本稿でも、分析に際して男女別比較の視点を取りいれると共に、性別役割分業観や権威主義的傾向など、学生の価値観も検討の対象とする。

以下本文では、(1) 性別や出身階層の基本的属性と大学進学までの学習の経験や背景、(2) 大学志望理由、(3) 教職志望と志望理由、(4) 職業観と将来設計、(5) 性別役割分業観などのジェンダー観や権威主義的傾向の価値観の5点について、それぞれ課程別・男女別に検討する。最後に、本研究からの示唆を総括する。

2. 研究方法

研究方法是、東京学芸大学（以下、東学大と記す）教員養成課程および新課程の2・3年生を主たる対象とする、授業で配布しての集団自記式による質問紙調査である。調査時期は、2003年12月～2004年1月および2004年4月～5月である。なお、教員養成課程を対象にした調査は、同時期におこなった国立教員養成系大学8大学（新構想大学を除く）を対象にした質問紙調査の一部である。

3. 分析結果

3.1 回答者の属性

3.1.1 性別

はじめに、回答者の課程別、男女別の内訳を表1に示す。

表1 東学大回答者の課程別性別構成 (%)

		男	女	合計(N)
全体	教員養成課程	46.0	54.0	100.0(400)
836名	新課程	42.0	58.0	100.0(436)

この内訳は、各課程の回答者数（教員養成課程400名、新課程436名）を100%とした時の性別構成比を表す。東学大における該当学年の在学者の構成比（2004年5月時点）は、教員養成課程で男子46.5%、新課程で男子42.2%である。これを回答者の課程別性別構成と照らし合わせてみると、ほぼ同じである。

参考までに、東学大は、教員養成系大学・学部の中で、男子学生の占める比率が最も高い。2004年5月1日時点で、国立教員養成系大学・学部全48校の2004年度入学者に占める男女比の平均は、教員養成課程では男子40.0%、女子60.0%、新課程では男子39.4%、女子60.6%となっている⁵。

3.1.2 家庭環境

学生の家庭環境を、親の学歴と親族内の教職経験者の有無から検討する。

3.1.2.1 親の学歴

表2-1と表2-2は、親の学歴を課程別と男女別でクロス集計したものである。その結果、課程別では、親の学歴に統計的有意差が見られなかったが、学生の性別で見ると、女子学生の親の方が男子学生よりも学歴が高い傾向が見られた。

より詳しく父親の学歴を課程別に見ると、両課程とも

表2-1 父親の学歴 (%)

課程・性別(N)		中学校	高校	専門学校	短期大学	高専	大学	大学院	χ^2
教員養成課程(396)		2.5	26.3	3.0	0.0	3.3	60.9	4.0	n.s.
新課程(417)		3.8	24.0	4.8	1.2	4.1	56.4	5.8	
教員養成課程	女子(215)	1.9	21.4	1.9	0.0	4.2	66.5	4.2	n.s.
	男子(181)	3.3	32.0	4.4	0.0	2.2	54.1	3.9	
新課程	女子(243)	2.5	20.2	5.8	0.8	4.1	57.6	9.1	**
	男子(174)	5.7	29.3	3.4	1.7	4.0	54.6	1.1	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表2-2 母親の学歴 (%)

課程・性別(N)		中学校	高校	専門学校	短期大学	高専	大学	大学院	χ^2
教員養成課程(397)		1.8	33.5	7.3	26.2	3.5	26.4	1.3	n.s.
新課程(422)		1.9	32.7	8.5	19.2	3.1	33.9	0.7	
教員養成課程	女子(215)	0.5	27.4	8.8	30.7	2.8	29.3	0.5	**
	男子(182)	3.3	40.7	5.5	20.9	4.4	23.1	2.2	
新課程	女子(244)	1.6	32.0	10.2	16.4	3.7	34.8	1.2	n.s.
	男子(178)	2.2	33.7	6.2	23.0	2.2	32.6	0.0	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

大学・大学院卒業が半数を超えており、教員養成課程の方がその割合が高い。これをさらに学生の性別で見ると、概して男子学生よりも女子学生の父親の学歴が高い。教員養成課程女子学生では、父親が大学・大学院卒である割合が7割を超え、全体の中で最も高い。

母親の学歴を見ると、教員養成課程・新課程ともに高校・専門学校卒までの学歴はほぼ同じ割合である。短大卒については、新課程よりも教員養成課程で高い割合を示し、大卒以上である割合は、教員養成課程よりも新課程で高い。これを男女別に見ると、教員養成課程で、女子学生の母親の方が男子学生の母親よりも学歴が高い傾向が示された。

父母ともに学歴が大卒以上であるケースを見てみると、教員養成課程よりも新課程の割合が高く、教員養成課程27.8％、新課程34.6％であった。これをさらに男女別で見ると、教員養成課程・新課程ともに女子学生の父母が大卒以上である割合が高く、特に、新課程女子の割合が最も高かった。

以上から、全体として見ると、女子学生の親の学歴が高いが、教員養成課程と新課程では、父親と母親の学歴の傾向がやや異なっていることが分かった。

3.1.2.2 親族内の教職経験者の有無

親族内の教職経験者の有無は、教員養成系大学への進学や教職志望に影響を及ぼす要因の一つと考えられる。

表3は、身近な人に教員または教員経験者がいるかを、「父、母、兄、姉、祖父、祖母、おじ、おば、その他」と「身近にはいない」の10項目から複数回答で選択してもらったものである。その結果、教職経験者が「身近にいない」と回答した割合は、教員養成課程で48.3％、新課程で51.1％であった。逆に言えば、東学大に在学している学生のおよそ半数には、家族や親戚などの身近な人に教職の経験者がいることが分かる。男女別でみると、教員養成課程・新課程ともに、女子の方が身近に教職経験者がいる割合が男子より若干高い。

どちらの課程でも、家族の中では「母」、親戚では「おじ」「おば」に身近な教職経験者がいる割合が高い。教員養成課程では、「父」や「祖父」「祖母」も多く回答されている。なお、「その他」の回答には、「いそこ」と回答する件数が多かった。

次に、本人の出身高校の国公立別および共学・別学別と、中学3年時の成績を概観する。

3.1.3 出身高校

卒業した高校の国公立別を見ると、課程および性別でほとんど違いが見られず、7割以上の学生が公立高校の出身であった。表4で高校の共学・別学を見ると、教員養成課程で男子校出身の方が、新課程では女子校出身者が若干多い。

表3 課程別 男女別 身近な教職経験者（％）

(N)	教員養成課程 (400)	新課程 (436)	専攻と教職 経験者の χ^2	教員養成課程(400)		新課程(436)	
				女子 (216)	男子 (184)	女子 (253)	男子 (183)
父	14.0	9.4	*	13.9	14.1	8.7	10.4
母	16.8	15.1	n.s.	17.1	16.3	14.6	15.8
兄	1.5	0.2	n.s.	1.4	1.6	0.4	0.0
姉	3.5	3.0	n.s.	2.8	4.3	2.8	3.3
祖父	12.5	8.9	n.s.	13.9	10.9	9.5	8.2
祖母	11.3	6.9	*	12.0	10.3	9.5	3.3
おじ	18.5	14.2	n.s.	18.5	18.5	15.4	12.6
おば	13.3	11.5	n.s.	16.7	9.2	12.3	10.4
その他	11.5	7.1	*	15.3	7.1	8.7	4.9
身近にいない	48.3	51.1	*	46.8	50.0	49.0	54.1

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表4 課程別 出身高校の別学・共学（％）

課程(N)	高校の別学・共学				χ^2
	共学	女子校	男子校	併学	
教員養成課程(399)	77.2	9.5	11.0	2.3	*
新課程(435)	77.5	14.0	7.8	0.7	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表5 課程別 男女別 中学3年時の成績 (%)

課程・性別(N)		上	中の上	中	中の下	下	χ^2
教員養成課程(400)		64.3	23.5	8.0	2.5	1.8	n.s.
新課程(434)		67.5	20.7	9.0	1.4	1.4	
教員養成課程	女子(216)	63.9	25.9	7.4	2.8	0.0	*
	男子(184)	64.7	20.7	8.7	2.2	3.8	
新課程	女子(252)	66.3	21.8	8.3	2.4	1.2	n.s.
	男子(182)	69.2	19.2	9.9	0.0	1.6	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

3.1.4 成績

中学3年時の成績を表5に示す5段階で回答してもらった結果、高校進学に強く関わる中学3年時の成績は、課程によっては有意差が見られず、両課程ともに成績が「上」だったとする回答が6割を超えていた。

3.1.5 リーダーシップ経験

中学・高校でのリーダーシップ経験があるかどうかを、「生徒会会長」「生徒会副会長」「委員会委員長」「委員会副委員長」「クラブや部活の部長」「副部長」そして「経験なし」から複数回答でたずねた結果、8割以上の学生が何らかのリーダーシップ経験があることが分かった。課程別には、新課程より教員養成課程の学生の方が全般にわたって経験率がやや高かった。男女別でみると、学校全体を代表する「生徒会会長」「副会長」「委員会委員長」の経験には男女で有意差が見られ、男子の経験率が高かった。ただし、リーダーシップ「経験なし」は男子14.7%、女子10.0%であることから、男女ともそのほとんどは何らかのリーダーシップ経験をもつことが分かった。

3.2 大学志望理由

3.2.1 大学志望理由

次に、大学志望理由を課程別、男女別に分析する。

東学大を志望した最も重要な理由を、表6に示す10項目から選択してもらったところ、課程別で有意差が見られた。教員養成課程の学生が「教員志望だから」を最も重要な理由としている一方で、新課程の学生は「魅力的な学科がある」「学費が安い」などを重視していた。

これを男女別に見てみると、教員養成課程では、男子の方が「教員志望だから」と回答する割合が高かった。女子はそれだけでなく「魅力的な学科」も比較的重視していた。

一方、新課程の志望理由は、男女でほぼ同じであった。ただし、最も重要な理由として「教員志望だから」とする回答は男子で1割強あり、新課程の男子にも教職志望を最も重要な大学志望理由とする者が、一定程度いることが分かった。

3.2.2 第一志望か否かの比較

表7は、東学大が第一志望であったかどうかをたずねたものである。この結果、新課程よりも教員養成課

表6 課程別 男女別 最も重要な大学の志望理由 (%)

課程・性別(N)		教員志望だから	魅力的な学科がある	学費が安い	国立大というブランド	地元の大学だから	大学のある都市が魅力	親の勧め	高校の先生の勧め	偏差値にふさわしい	その他	χ^2
教員養成課程(395)		55.2	12.9	7.6	3.5	0.5	5.1	0.3	1.3	4.3	9.4	***
新課程(429)		6.3	39.2	20.5	6.5	1.2	9.6	0.9	0.9	7.5	7.5	
教員養成課程	女子(213)	46.9	20.2	9.9	1.9	0.9	4.2	0.5	1.9	5.2	8.5	***
	男子(182)	64.8	4.4	4.9	5.5	0.0	6.0	0.0	0.5	3.3	10.0	
新課程	女子(249)	2.8	41.8	22.1	6.0	0.8	8.8	0.8	0.8	8.4	7.6	n.s.
	男子(180)	11.1	35.6	18.3	7.2	1.7	10.6	1.1	1.1	6.1	7.2	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表7 課程別 東学大の志望状況 (%)

課程・性別(N)		東学大は第一志望の大学か		χ^2
		yes	no	
教員養成課程(399)		78.9	21.1	***
新課程(435)		55.2	44.8	
教員養成課程	女子(216)	81.0	19.0	n.s.
	男子(183)	76.5	23.5	
新課程	女子(253)	60.1	39.9	*
	男子(182)	48.4	51.6	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

程、男子よりも女子学生が東学大を第一志望としていたことが分かった。

詳細に見ると、教員養成課程の学生は8割近くが第一志望であったと回答したが、新課程の学生が東学大を第一希望と回答した割合は、5割台に留まっていた。

また、東学大の志望状況を男女別で見ると、教員養成課程も新課程も、女子の方が東学大を第一志望であったとする回答が高く、教員養成課程では8割、新課程では6割の女子が、東学大を第一志望大学として入学していた。「第一志望ではなかった」割合が最も高かったのは新課程男子であり、過半数に達していた。

3.2.3 東学大が第一志望だった学生の特徴

では、第一志望であった学生と、そうではなかった学生にはどのような差異があるのか。大学の志望理由から分析しよう。

東学大が第一志望だった場合、最も重要な志望理由を課程別で見ると(表8)、明確な違いが示された。教員養成課程の学生の回答が最も多かったのは「教員志望だったから」であり62.5%、新課程の場合は「魅力

的な学科がある」で50.2%であった。

これらを男女別に見ると、志望理由の回答傾向に違いが見られた。教員養成課程では、「教員志望だから」とする割合が男子の方に高く7割以上であった。女子も「教員志望だから」を最も多く選択していたが5割台に留まっていた。女子では「魅力的な学科」と回答する割合も多く、男子の4.3%に対して20.8%であった。

新課程を見ると、男女とも最も多く選択されていた志望理由は「魅力的な学科」だったが、その割合は女子の方が高く、男子46.6%に対して女子52.3%であった。次いで多かったのは女子では「学費が安い」の16.8%（男子6.8%）であったが、男子では「大学のある都市が魅力」であることを大学志望理由に挙げる者が多かった（男子14.8%、女子8.1%）。また、男子の場合、「教員志望だから」とする者が女子より多かった（男子10.2%、女子2.7%）。

3.2.4 東学大が第一志望でなかった学生の特徴

東学大が第一志望ではなかった学生の場合について、大学志望の最も重要な理由を、表9で課程別に見てみよう。

表8 東学大を第一志望とする学生の最も重要な大学志望理由 (%)

課程・性別(N)		教員志望 だから	魅力的な学 科がある	学費が 安い	国立大とい うブランド	地元の大学 だから	大学のある 都市が魅力	親の勧め	高校の先生 の勧め	偏差値に ふさわしい	その他	χ^2
教員養成課程(312)		62.5	13.5	6.1	2.6	0.3	3.8	0.0	1.0	1.9	8.3	***
新課程(237)		5.5	50.2	13.1	4.2	1.7	10.5	0.4	1.7	5.9	6.8	
教員養成課程	女子(139)	54.3	20.8	8.7	0.6	0.6	3.5	0.0	1.2	1.7	8.7	***
	男子(173)	72.7	4.3	2.9	5.0	0.0	4.3	0.0	0.7	2.2	7.9	
新課程	女子(149)	2.7	52.3	16.8	4.7	0.7	8.1	0.0	1.3	6.7	6.7	*
	男子(88)	10.2	46.6	6.8	3.4	3.4	14.8	1.1	2.3	4.5	6.8	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表9 東学大を第一志望としなかった学生の最も重要な大学志望理由 (%)

課程・性別(N)		教員志望 だから	魅力的な学 科がある	学費が 安い	国立大とい うブランド	地元の大学 だから	大学のある 都市が魅力	親の勧め	高校の先生 の勧め	偏差値に ふさわしい	その他	χ^2
教員養成課程(82)		28.0	11.0	13.4	7.3	1.2	8.5	1.2	2.4	13.4	13.4	***
新課程(191)		7.3	25.1	29.8	9.4	0.5	8.4	1.6	0.0	9.4	8.4	
教員養成課程	女子(40)	15.0	17.5	15.0	7.5	2.5	7.5	2.5	5.0	20.0	7.5	n.s.
	男子(42)	40.5	4.8	11.9	7.1	0.0	9.5	0.0	0.0	7.1	19.0	
新課程	女子(100)	3.0	26.0	30.0	8.0	1.0	10.0	2.0	0.0	11.0	9.0	n.s.
	男子(91)	12.1	24.2	29.7	11.0	0.0	6.6	1.1	0.0	7.7	7.7	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

まず、教員養成課程に在学する学生では、第一志望でなくても「教員志望だから」という理由が他の理由よりも多く挙がっている。特に、男子ではその回答が4割に達していた。一方、女子の場合は「教職志望だから」と同程度かそれ以上に、「偏差値にふさわしい」「魅力的な学科」「学費の安さ」が挙げられている。

新課程の学生では、「魅力的な学科があった」とほぼ同程度に、「学費が安い」という理由が多く挙げられている。さらに男女で比較した場合、これら2項目に次いで多かった理由が、女子では「偏差値にふさわしい」、男子では「教職志望」であり、それぞれ1割強であった。このように、教職志望を最も重要な大学志望理由として挙げる者は男子に多く、新課程であっても男子に教職志望が一定程度存在していることが分かる。

以上のように、東学大に在学する学生の大学志望度と志望理由の特徴を、課程別に概観すると、東学大が第一志望だった学生は、新課程よりも教員養成課程、男子より女子に多かった。また、学生が東学大を志望する理由については、教員養成課程では「教職志望」が、新課程では「魅力的な学科」が、最も重要な志望理由として選択される傾向があった。

3.3 学生の教職志望度と教職志望理由

学生は、どの程度、どのような理由で教職を志望しているのかを、課程別、男女別に検討していこう。

3.3.1 教職志望度

まず、教員志望の度合いを課程別・男女別で見えてみる。表10は、教職の志望度合いを「なんとしても就きたい」「できれば就きたい」「どちらでもよい」「あまり就きたくない」「教職に就きたくない」の5段階でたずねたものである。これによると、教職志望度は教員養成課程で高く、新課程では低いことが分かる。

男女別で見ると、教員養成課程では、女子よりも男子の方が積極的に教職を志望していることが分かる。新課程では、「教職に就きたくない」とする回答が最も多かったが、その割合は女子に多い。新課程男子は教職に就きたいとする割合がやや高く、「どうしても就きたい」「できれば就きたい」を合わせるとその割合は22.1%になっている。

3.3.2 教職志望理由

次に、教職を志望する学生に、教職志望の理由について表11に挙げた12項目から複数回答で回答を得た。その結果、教員養成課程と新課程の傾向に大きな違い

表10 課程別 男女別 教職志望度 (%)

課程・性別(N)		教職志望度					χ^2
		なんとしても就きたい	出来れば	どちらでもよい	あまり就きたくない	教職に就きたくない	
教員養成課程(400)		30.3	38.5	15.6	7.7	7.9	***
新課程(433)		3.7	13.4	23.8	18.7	40.4	
教員養成課程	女子(216)	25.9	39.8	16.2	10.2	7.9	n.s.
	男子(184)	35.9	36.4	14.7	4.9	8.2	
新課程	女子(252)	2.0	11.5	22.6	20.2	43.7	n.s.
	男子(181)	6.1	16.0	25.4	16.6	35.9	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表11 課程別 男女別 教職志望理由(複数回答)(%)

課程・性別(N)		専門的技術・知識がいかせる	経済的に安定	地元で働ける	素晴らしい先生との出会い	ひどい先生との出会い	子どもが好き	日本の教育を改革したい	休日・休暇が多い	比較的男女平等	性別による適性	家族・親族の勧め	その他
教員養成課程(341)		31.8	39.7	12.2	52.2	14.0	77.6	14.6	12.0	11.1	3.5	9.3	18.4
新課程(160)		33.1	46.3	13.1	43.1	10.0	43.8	20.6	18.1	18.8	3.1	13.8	21.3
教員養成課程	女子(176)	39.2	43.8	10.8	50.6	13.1	78.4	12.5	10.2	19.9	6.8	12.5	17.6
	男子(165)	23.6	35.2	13.9	54.5	15.2	77.0	17.0	13.9	1.8	0.0	6.1	19.4
新課程	女子(78)	37.2	52.6	12.8	38.5	6.4	47.4	16.7	19.2	33.3	6.4	20.5	16.7
	男子(82)	29.3	40.2	13.4	47.6	13.4	40.2	24.4	17.1	4.9	0.0	7.3	25.6

表12 課程別 男女別 最も重要な教職志望理由 (%)

課程・性別(N)	専門的技術・知識がいかせる	経済的に安定	地元で働ける	素晴らしい先生との出会い	ひどい先生との出会い	子どもが好き	日本の教育を改革したい	休日・休暇が多い	比較的男女平等	性別による適性	家族・親族の勧め	その他	χ^2
教員養成課程(333)	9.3	8.7	0.6	17.9	0.6	46.3	2.4	1.2	0.0	0.3	0.3	12.5	***
新課程(151)	11.3	15.9	0.7	19.2	0.7	19.2	7.9	4.0	0.0	0.7	2.0	18.5	
教員養成課程	女子(171)	11.1	9.4	0.6	14.0	0.6	48.5	2.9	0.6	0.0	0.6	11.1	*
	男子(171)	7.4	7.4	0.6	22.2	0.6	43.8	1.9	0.0	0.0	0.0	14.2	
新課程	女子(71)	11.3	15.5	1.4	14.1	1.4	25.4	5.6	4.2	0.0	1.4	15.5	***
	男子(80)	11.3	16.3	0.0	23.8	0.0	13.8	10.0	3.8	0.0	0.0	21.3	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

があることが分かった。

教員養成課程では、教員を志望する理由として「子どもが好きだから」が最も多く、ついで「すばらしい先生との出会い」「経済的に安定」の順に多く挙げられていた。新課程ではこれらの3項目がほぼ同程度であった。

さらに男女別で見ると、どちらの課程においても共通して男女の回答に違いが見られた。すなわち、「経済的に安定」「専門的技術・知識を生かせる」「比較的男女平等だから」「家族・親戚の勧め」といった項目で、女子の回答が多かった。

次に、こうした教職志望理由のうち、最も重要な理由は何かをたずねたところ、教員養成課程・新課程ともに最重要志望理由の上位に上った項目は、「子どもが好き」「すばらしい先生との出会い」と共通していたものの、教員を志望する教員養成課程学生と新課程学生の間には違いが見られた。教員養成課程学生の場合、「子どもが好きだから」と回答したのは46.3%で、「素晴らしい先生との出会い」（17.9%）と2倍以上の開きがあった。一方、新課程学生の場合は、「子どもが好きだから」と「素晴らしい先生との出会い」が2割程度で、ほぼ同率であった。

最も重要な教職志望理由を、さらに男女別に見てみると、表12に示すように、どちらの課程でも、「子どもが好き」の回答は、女子学生の方が多く、男子の方が「すばらしい先生との出会い」を多く挙げている。

以上から、程度の差はあれ、どちらの課程でも、子どもが好きであることや、現職教師との出会いが、教職を志望する理由の背景にあることが分かる。また、女子の場合は、これらに加えて、「専門知識を生かせる」

「経済的に安定している」「男女平等」といった要因が、志望理由に関係していることがうかがえる。

3.4 学生の職業観と将来設計

前節の教職志望理由と関連して、学生の職業観や、将来設計に関する意識を検討する。

3.4.1 職業観

学生の職業観を見るために、学生が職業選択で重視することがらを以下の表13に挙げた10項目から複数選択してもらった。その結果、教員養成課程でも新課程でも、職業の専門性や社会的貢献に加え、家庭生活と両立しやすいことを職業選択の重要項目として捉えていることが分かった。

課程別で差が見られたのは、「高収入を得られる」であり、教員養成課程より新課程で多かった。また、高収入に関しては、女子よりも男子の方がより重視している傾向が見られた。

さらに、職業選択において同じ質問項目の中から最も重視することを聞いた結果、下の表14に示すように職業の専門性が最も重視されることが分かった。特に、教員養成課程よりも新課程で、男子より女子の方が、多く挙げていた。また、社会への貢献を重要視する割合も比較的高く、新課程よりも教員養成課程で高い。

3.4.2 将来設計

では、学生は将来どのような生活形態・夫婦像を理想として想定しているのか。理想の関係を表15に示す8項目でたずねた。その結果、全体として、その多くが固定的な性別役割分業によらないパートナーシップを理想

表13 課程別 男女別 職業選択で重視すること（複数回答）（%）

課程・性別(N)	専門的技術・能力をいかせる	社会や人のためになる	失業の恐れがない	高収入が得られる	家庭生活と両立しやすい	女性/男性らしい仕事	親の期待にこたえる	命令を受けず自由にできる	休日・休暇が多い	その他
教員養成課程(399)	78.2	55.9	32.1	26.1	52.6	1.0	10.0	19.8	26.1	16.8
新課程(436)	80.1	47.0	30.1	37.0	46.5	3.0	15.5	24.1	30.6	15.7
教員養成課程	女子(176)	81.5	58.3	30.6	20.4	57.6	0.9	12.5	16.2	23.1
	男子(165)	74.1	53.0	33.9	32.8	47.0	1.1	7.1	24.0	29.5
新課程	女子(253)	82.9	44.2	31.9	31.9	47.8	2.8	19.1	22.7	29.5
	男子(183)	76.2	50.8	27.6	44.2	44.8	3.3	10.5	26.0	32.0

表14 課程別 男女別 職業選択で最も重視すること（%）

課程・性別(N)	専門的技術・能力をいかせる	社会や人のためになる	失業の恐れがない	高収入が得られる	家庭生活と両立しやすい	女性/男性らしい仕事	親の期待にこたえる	命令を受けず自由にできる	休日・休暇が多い	その他	χ ²
教員養成課程(398)	37.2	18.3	6.8	4.8	12.6	0.0	0.3	3.0	3.3	13.8	n.s.
新課程(425)	43.5	12.7	5.9	4.5	11.1	0.5	1.9	4.2	1.9	13.9	
教員養成課程	女子(121)	37.5	20.8	7.9	1.9	12.0	0.0	0.5	2.3	3.2	n.s.
	男子(186)	36.8	15.4	5.5	8.2	13.2	0.0	3.8	3.3	13.7	
新課程	女子(247)	46.6	10.9	6.5	2.8	12.6	0.4	3.2	3.2	13.0	**
	男子(178)	39.3	15.2	5.1	6.7	9.0	0.6	5.6	3.4	15.2	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表15 課程別 男女別 性別役割観 (%)

課程・性別(N)		1	2	3	4	5	6	7	8	χ^2
教員養成課程(399)		6.3	3.5	16.8	60.7	3.0	3.3	3.5	3.0	*
新課程(426)		4.7	3.8	14.1	57.5	2.6	2.8	8.7	5.9	
教員養成課程	女子(216)	5.1	3.7	11.6	69.9	1.9	2.3	3.2	2.3	**
	男子(183)	7.7	3.3	23.0	49.7	4.4	4.4	3.8	3.8	
新課程	女子(250)	3.6	4.8	10.4	64.0	2.0	2.0	6.4	6.8	**
	男子(176)	6.3	2.3	19.3	48.3	3.4	4.0	11.9	4.5	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

1. 夫は仕事中心、妻は家事や子育て中心の生活
2. 夫は仕事中心、妻は家事や子育てをしながら仕事をする生活
3. 夫は仕事をしながら家事や子育てに協力、妻は家事や子育て中心の生活
4. 夫も妻も同等に仕事を持ち、家事や子育ても2人で協力して行う生活
5. 夫と妻のどちらか一方が仕事中心、他方が家事や子育て中心の生活
6. その他
7. 結婚は考えていない
8. わからない

としていることがうかがえた。

課程別では回答にほとんど差がみられず、むしろ、男女でその度合いに温度差が見られた。すなわち、男女とも「夫も妻も同等に仕事を持ち、家事や子育ても2人で協力して行う生活」が最も多く支持されているが、女子では6割以上と、男子よりも支持が高い。

また、「夫は仕事をしながら家事や子育てに協力、妻は家事や子育て中心の生活」には男子の回答が多く、どちらの課程でも、女子と比較すると10ポイント前後の差が見られる。

以上から、全体的に職業の専門性を最も重視する職業観が示されたが、教員養成課程では社会への貢献も比較的重視されていることが分かった。また、とくに教員養成課程の女子は、職業の専門性に加えて家庭生活との両立を重視していることが明らかになった。

将来設計については、女子の方がパートナーと対等な関係性の家庭生活を強く望み、男子には性別役割分業的な家庭生活を展望する割合が少なかった。これより、家庭生活と関連する職業についての捉え方やその度合いに、男女で差異や温度差があることが示された。

3.5 学生の価値観

本節では、学生の価値観について、ジェンダー観と権威主義という2つの観点から、学生の課程別・男女別に検討しよう。

3.5.1 ジェンダー観

ジェンダー観として、「性別特性論」「平等観」「学校教育に関連する項目」「性暴力のとりえ方」「夫や恋人など、親密な人間関係における権力関係」などの項目を設定した。そのそれぞれに、「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4件法で回答を得た。

その結果、ほとんどの項目において、課程別よりも男女別に回答の違いが顕著であったので、ここでは主として、全体的な回答傾向と男女別の違いを中心に述べ、課程別の結果については特徴がみられた点のみ取り上げる。

3.5.1.1 性別特性論

まず、ジェンダー観のうち、性別特性論に関する項目への回答傾向を見てみる。

性別特性論とは、先天的に男女には大きな違いがあり、その違いに基づいて、役割や社会的処遇が異なるのは自然であるとの考え方である。例えば、男性は主、女性は従ないしは副の立場をとるべきという考え方や、男性は外で働き、女性は家事・育児を担うべきといった考え方の根拠を男女の先天性に求める場合がこれにあたる。ここでは「能力や適性は男女で異なる」「男女の違いを認め合い補い合うことが大切」「男／女らしさを否定すべきではない」といった項目でたずねた。

これらの性別特性論に関わる考え方について肯定する学生は、男女ともにそれぞれ8割以上と多数を占め、特に、女子よりも男子の方に強く肯定する傾向が見られた(表16-1)。ここから、性別特性論を基にしたジェンダー観は、課程を問わず学生に広く浸透しており、特に男子の方にそうした意識が強いということが分かる。

3.5.1.2 平等観

平等の捉え方についてはどうだろうか。「能力と意欲さえあれば、今は女性も差別されない」を見ると(表16-2)、半数強が「あまりそう思わない」「全くそう思わない」と回答し、男子よりも女子の方が平等達成に対して懐疑的であった。また、家庭生活負担の度合いについては、性別を問わず9割を超える学生が「家事や育児の負担は女性にかかりすぎている」と捉えている。

表 16-1 課程別 男女別 ジェンダー観 1 (%)

課程・性別(N)		能力や適性は男女で異なる				χ^2
		そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	
教員養成課程(399)		51.4	36.6	9.3	2.8	n.s.
新課程(430)		43.3	41.4	9.8	5.6	
教員養成課程	女子(216)	47.2	39.8	10.6	2.3	n.s.
	男子(183)	56.3	32.8	7.7	3.3	
新課程	女子(251)	36.3	47.4	11.2	5.2	**
	男子(179)	53.1	33.0	7.8	6.1	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 16-2 課程別 男女別 ジェンダー観 2 (%)

課程・性別(N)		能力と意欲があれば、今は女性も差別されない				χ^2
		そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	
教員養成課程(397)		20.2	28.7	37.0	14.1	n.s.
新課程(429)		16.8	28.7	40.3	14.2	
教員養成課程	女子(216)	15.3	29.6	39.8	15.3	n.s.
	男子(181)	26.0	27.6	33.7	12.7	
新課程	女子(250)	13.2	27.6	44.8	14.4	n.s.
	男子(179)	21.8	30.2	34.1	14.0	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表 16-3 課程別 男女別 ジェンダー観 3 (%)

課程・性別(N)		平等を求めるなら、女性は甘えを捨てるべき				χ^2
		そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	
教員養成課程(396)		24.1	28.6	35.4	11.9	n.s.
新課程(426)		23.7	33.8	33.6	8.9	
教員養成課程	女子(216)	22.8	37.7	32.6	7.0	***
	男子(180)	25.6	17.8	38.9	17.8	
新課程	女子(248)	23.8	36.7	31.9	7.7	n.s.
	男子(178)	23.6	29.8	36.0	10.7	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

一方で、「平等を求めるなら、女性は甘えを捨てるべき」に対しては、学生の5～6割近くが「とても」か「少し」同意しており、かつ、どちらかといえば男子よりも女子の方が同意する回答が多い(表16-3)。ここから女子の方が、女性の社会参加に関してシビアに評価していることがうかがえる。また、「男女は生物学的に異なるのだから何でも平等というのはおかしい」については、性別を問わず7～8割の学生が同意していた。

このように、男女平等は達成されていないとの現状認識を示しながらも、平等の捉え方には揺らぎが見える。学生が平等の内実をどのように捉えているのかを、より詳細に捉えていく必要がある。

3.5.1.3 親密な関係における権力関係と性的暴力

夫婦や恋人など、親密な関係におけるジェンダーの権力関係について、「結婚生活の重要事項は夫が決めた方がいい」「恋人同士がけんかしたとき女性がおれる方がいい」の2項目を設けたが、どちらの項目においても反対意見が9割以上と多数を占めた。男女とも同様

の傾向であったが、女子の方がより明確な反対意見を持っていた。

性的暴力に関しては、痴漢とセクシュアルハラスメントの捉え方をたずねる項目を設定した。その結果、「痴漢などの被害にあう女性には落ち度がある」「セクハラのは多くは男性が女性と親しくしようとしただけ」という両項目に対して、多くは否定的であった。セクシュアルハラスメントに対しては、女子よりも男子が「少しそう思う」とやや同情的な反応を示していた。

3.5.1.4 学校教育での男女平等推進についての捉え方

教員養成系大学の学生を調査対象としていることから、ジェンダー観をみるにあたって、学校教育での男女平等推進についての捉え方に関する質問項目を2つ設定した。この2項目には、課程によって回答傾向に若干の違いが見られた。

まず「義務教育で、もっと男らしさ・女らしさを大切にした教育をすべき」に対しては、反対意見が8割

を超え、多数を占めた(表16-4)。

男女別に回答傾向を見ると、女子の方に反対意見が多い。一方、肯定意見を見ると、新課程男子でその割合が最も高く、「そう思う」「少しそう思う」を合わせるとおよそ3割におよんでいる。課程別に見ると、「全くそう思わない」という明確な反対意見は、教員養成課程より新課程の方が少し多かった。

次に、「女性の校長・教頭をもっと増やしたほうがいい」という女性の管理職登用に関する捉え方を見ると、賛成意見が6割前後に達しており、かつ女子の方が多かった(表16-5)。課程別に見ると、教員養成課程よりも新課程の方に賛成する割合が高かった。

これらの結果から、学校教育における男女平等の推進については、教員養成課程よりも新課程の学生の方が積極的であることがうかがえる。

以上のように、ジェンダー観については、在籍している課程や専攻よりも、性別によって捉え方が異なっていることが示された。しかし、学校教育での取り組みに対する捉え方といった、より具体的な問題については、教員養成課程と新課程とで回答にやや違いが見られた。

3.5.2 生徒－教師関係の捉え方

本項では、生徒と教師との関係のあり方を学生がどう捉えているかを、権威主義尺度を手がかりに検討していく⁶。ここで用いる権威主義的尺度とは、義務教育

段階の生徒－教師関係の捉え方を、次の10項目によって尺度化したものである。

すなわち、「教師には毅然とした態度が必要」「児童に規律ある行動をさせることが必要」「同僚との同歩調が必要」「児童は指導を素直に聞く態度が必要」「児童への毅然たる指導が必要」「児童との毅然たる一線が必要」「児童への厳しさが必要」「集団全体の向上が学級経営の基本」「児童には規律ある態度が必要」「児童がきまりを守ることは社会性の育成につながる」の10項目である。そして「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「全く思わない」の4件法で回答を求めて、そのそれぞれに1～4点を与えて得点化した。

これを権威主義尺度とし、得点の分布から10～18点までを「高」、19～22点までを「中」、23～40点までを「低」とした。なお、権威主義尺度の得点が低いほど、生徒－教師関係における教師の権威主義的傾向が高くなることを示す。

権威主義尺度と課程との関連をみると、表17に示したように、全体的に権威主義の度合いが「中」であるものが最も多かったが、「高」と「低」の割合を見ると、新課程よりも教員養成課程の方に権威主義的傾向が見られた。これをさらに男女別に見ると、統計的な有意差は認められなかったが、女子よりも男子の権威主義尺度が「高」である割合が若干高かった。

では、こうした学生の特徴を踏まえて、改めてどのような学生が教職に就こうとしているのか、教職志望度を「就きたい」「どちらでもよい」「就きたくない」

表16-4 課程別 男女別 ジェンダー観4 (%)

課程・性別(N)		義務教育で、もっと男らしさ・女らしさを大切にしたい教育をすべき				χ^2
		そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	
教員養成課程(396)		2.8	16.9	52.3	28.0	n.s.
新課程(423)		3.1	15.6	45.6	35.7	
教員養成課程	女子(215)	1.4	14.4	54.9	29.3	n.s.
	男子(181)	4.4	19.9	49.2	26.5	
新課程	女子(245)	1.6	9.4	49.4	39.6	***
	男子(178)	5.1	24.2	40.4	30.3	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表16-5 課程別 男女別 ジェンダー観5 (%)

課程・性別(N)		女性の校長・教頭をもっと増やした方がよい				χ^2
		そう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	
教員養成課程(391)		13.0	44.0	33.2	9.7	*
新課程(423)		20.8	40.4	29.8	9.0	
教員養成課程	女子(215)	14.4	51.2	28.4	6.0	**
	男子(176)	11.4	35.2	39.2	14.2	
新課程	女子(245)	22.4	42.0	28.2	7.3	n.s.
	男子(178)	18.5	38.2	32.0	11.2	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表17 課程別 男女別 権威主義尺度との関連 (%)

課程・性別(N)		権威主義尺度			χ^2
		高	中	低	
教員養成課程(398)		34.7	39.7	25.6	*
新課程(429)		30.3	35.2	34.5	
教員養成課程	女子(212)	33.0	38.2	28.8	n.s.
	男子(183)	37.2	41.0	21.9	
新課程	女子(250)	28.4	37.2	34.4	n.s.
	男子(179)	33.0	32.4	34.6	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

の3カテゴリーにまとめなおし、そのうち教職に就きたい学生だけを抽出して、権威主義的傾向の度合いとの関係を見た。

その結果、以下の表18に示されるように、教職に就きたいと考えている新課程の学生の場合、権威主義尺度が「低」である場合が最も多かった。一方、教職に就きたい教員養成課程学生の権威主義尺度が「低」である割合は、新課程の34.7%と比較すると19.6%と低く、新課程の学生よりも権威主義的傾向が強く見られた。

4. まとめと今後の課題

以上の分析結果を総括し、その意義を述べる。分析の結果明らかになったのは、主に以下の5点である。

- (1) 学生の出身階層については、両親とも大卒以上である割合は新課程の方が高いことから、学生の出身階層は教員養成課程よりも新課程の方が高い傾向にあると考えられる。男女別では、男子よりも女子の方が高い。
- (2) 大学志望理由については、教員養成課程では圧倒的に「教員志望だから」であるのに対し、新課程では「魅力的な学科があるから」であった。しかし、新課程であっても男子の約1割は、教職志望を最も重要な大学志望理由にあげていた。
- (3) 教職志望理由については、教員養成課程の学生は「子どもが好きだから」教職を目指す傾向があるのに対し、新課程では「経済的な安定」のイメージ

が教職を目指す大きな要素となっていた。

- (4) 職業観については、課程を問わず約8割の学生が、職業の専門性を重視していた。課程別の特徴を見ると、新課程では「高収入が得られる」を選択する学生が教員養成課程より多く、特に新課程の男子でその傾向が強かった。
- (5) 価値観については、いずれの課程の学生も、性別特性論を基にしたジェンダー観を持っていた。一方、生徒－教師関係については、新課程の学生の方が、教員養成課程の学生よりも非権威主義的であった。

以上の実態から、教員養成課程と新課程の学生は、やや異なる価値傾向をもつことが実証的に示されたことになる。

戦前の師範学校の反省を踏まえれば、こうした学生たちが、同じ大学で共に学ぶ機会を持つことの意義は大きい。戦前の師範学校においては、学生の進路は教職のみに閉ざされ、教職志望の学生のみが、師範学校出身の教員のもとで学ぶ「閉鎖的」な構造が成立していた。また、その構造と関連して、学生が共通して「師範気質」と揶揄される、偏った価値観や雰囲気をもっていた。これらのことが反省され、戦後は優秀で多様な人材を教員へ登用する環境を創出する制度づくりが目指されたのである。

現在においても、学生が多様な価値観に触れる環境を創出することは、教職志望・非志望の学生相互にとって知的な刺激となるとともに、大学にとっても学生の多様性の確保や活力ある学風の創出につながる点で、

表18 教職に就きたいと考える学生の課程別権威主義的傾向 (%)

課程(N)	権威主義尺度(%)			χ^2
	高	中	低	
教員養成課程(275/400)	37.8	42.5	19.6	*
新課程(72/436)	31.9	33.3	34.7	
合計(347/836)	36.6	40.6	22.8	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

非常に重要である。

具体的には、たとえば、新課程の学生が教員養成課程の学生よりも、相対的に非権威主義的である点は注目に値する。これからの国立教員養成系大学・学部が、子どもの立場にたった、学校教育の充実・改善に積極的にとりくむ教員の輩出をめざすならば、新課程の学生の存在は、権威主義的傾向をもつ教員志望の学生に、価値観を変容させる契機をもたらす可能性を秘めており、大学全体としての学習環境に重要な意味をもっているといえよう。

本研究は緒に就いた段階であり、本稿は東京学芸大学の事例を分析するに留まっている。新課程の存在意義の検討や教員養成課程の学生像の探求には、他大の事例を含めた詳細な調査が必要である。さらに、以上の分析で明らかになった学生の実態は、今後の教員養成課程の教育内容に関して、ジェンダーの視点からの検討が一層必要であることを示している。以上2点は、今後の重要な課題である。

付 記

本研究は、平成14～16年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「ジェンダーの視点からの教員養成・再教育プログラムに関する研究(研究代表:村松泰子)」によって行った研究成果の一部である。

注

- 1 東京学芸大学においては、教員養成課程は「教育系」、新課程は「教養系」が正式名称となっている。本稿では、混同を防ぐため、東京学芸大学の事例においても「教員養成課程」「新課程」の語を一貫して使用する。
- 2 文献6) 参照。
- 3 本調査では、性的マイノリティに配慮し、性別に関して自記式を採用した。自記式で何の記入もないケースが2件あった。本論では、無回答の2件を除いた男女別集計をもとに分析する。
- 4 例えば、文献10) など。
- 5 文献5) 参照。
- 6 本研究における権威主義尺度は、既存研究である文献8) を基にしている。

引用・参考文献

- 1) 大学評価・学位授与機構『「教養教育」評価報告書(平成12年度着手継続分 全学テーマ別評価)』東京学芸大学, 2003年
- 2) 亀田温子・河上婦志子・村松泰子・岸澤初美『教師教育におけるジェンダー・フリー学習の実態調査報告書—97年度東京女性財団自主研究助成・報告書』, 1998年
- 3) 亀田温子・河上婦志子・村松泰子『大学の教員養成課程におけるジェンダー教育に関する調査報告』, 1998年
- 4) 国立教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会『今後の国立教員養成系大学・学部の在り方について』報告書, 2001年
- 5) 文部科学省『教員養成大学・学部及び附属学校資料(平成16年度)』, 2004年
- 6) 佐久間亜紀・木村育恵・福元真由美・大竹美登利「教員養成のヒドゥン・カリキュラム研究—国立教員養成系大学教員調査のジェンダーの視点からの分析を中心に—」『日本教師教育学会年報』第13号, pp. 94-104, 2004年
- 7) 館かおる『大学教育とジェンダー—全国四年制大学教員数・学生数調査から—』お茶の水女子大学女性文化研究センター, 1994年
- 8) 田上不二夫監修, 河村茂雄『楽しい学校生活をおくるためのアンケートQ・U実施・解釈ハンドブック小学校用』図書文化, 1999年
- 9) 東京学芸大学出版会設立準備会『これからの教育と大学』制作委員会編『これからの教育と大学』学校図書, 2001年
- 10) Tyack, D. & Hansot, E., *Managers of Virtue*, Basic Books, 1982.